『永遠の友情』

ひじり在宅クリニック　院長　岡本 拓也

忠生さんご夫妻のお宅に初めて伺ったのは年の瀬も迫る師走の金曜日だった。

「手をつないで歩かれるようなとっても仲の良いご夫妻なんですよ！」との報告を聞いたのはケアマネの廣内さんからだった。初めてご自宅を訪れた日、玄関まで迎えに出て来てくれた奥様の顔を一目見て、確かにそんな雰囲気の方だなと思った。ご夫妻が直面している状況の厳しさにもかかわらず、玄関のドアを開けて私たちを迎えてくれた奥様の笑顔は暖かい小春日のような光をまとっていた。

忠生さんの家はしだれ桜で有名なお宅だったが数年前にそのしだれ桜を切り倒した、という話を耳にして、ふと思い浮かんだのが伊三郎さんだった。伊三郎さんは2年ほど前まで訪問診療で診ていた患者さんだ。

診察を終えた後、忠生さん宅の居間で茶飲み話をしながら、「そう言えば、伊三郎さんって人が仰ってたんですよねぇ。伊達でも有名なしだれ桜の家の方と仲良しでって…」と、独り言のように呟いた私の隣にいた忠生さんの奥様は、その呟きを聞き逃すことなく、「野口先生をご存知なんですか!?」聞けば、伊三郎さんと忠生さんは同じ学校で働いたことがきっかけで大の親友になられ、家族ぐるみの親しいお付き合いをして来られたようで、なんとお墓も一緒だとのこと。伊三郎さんは自分が死んだら遺灰は海に流すつもりだった。その背景には、子どもは嫁がせた一人娘だけということもあったろう。しかし、忠生さん夫妻と話していてそのことが話題になった時、忠生さんの奥様から「野口先生、そんなことしないで私達のお墓に一緒に入りましょうよ！」と言われ、まさかの提案にさすがの伊三郎さんも驚き最初は遠慮していたが、最終的には「いいのかい。じゃあ、そうしてもらおうかな」ということになった。伊三郎さんは他の3人に先んじてそのお墓に入ることになった。伊三郎さんの奥様と忠生さん夫妻の名前も既に赤い字で墓に彫られているとのこと。「これも野口先生が書かれたものなのよ」と言われて見やった居間の壁には、能筆家であった伊三郎さんの書が額に入れて飾られていた。

忠生さん宅を辞する際、挨拶をするために忠生さんが寝ている部屋を再び訪れた。奥様が「お父さん、先生は野口先生を知っていらっしゃるんですって！」と声をかけると、先ほどお会いした時には焦点の定まらない虚ろな表情をしていた忠生さんであったが、今度は「ほー」と声を出し、一瞬きりっとした表情に変貌されたのを見て、今度は私の方が心の中で（ほー）と思った。お互いに刺激し合い高め合っていた伊三郎さんと忠生さんの交友関係の質を垣間見た気がした。

伊三郎さんは、教師として忠生さんの先輩にあたる方で、言葉の良い意味で真の人格者、教育者とはこのような方のことを言うのだろうと思わせられるような懐深く愛情深い方だった。「黄泉の国へ旅立ってから開いてください　伊三郎」と達筆で書かれた大きな紙袋の中には遺書が入っていた。亡くなった後にそれを見つけた家族が、私にもそれを読ませてくれた。毛筆で何十枚もの紙に清書された遺書の最後は、次の言葉で締めくくられていた。「十分楽しく、悔いなく生きることができたが、恵子のためにもっと生きたい。」重度の認知症を患っていた妻のことをいつも思い遣っていた伊三郎さんの思いが伝わってきて胸が熱くなった。

忠生さん宅を初めて訪れた日から数えてちょうど1週間後の金曜日、忠生さんは眠るようにして、奥様の腕の中で最後の息を引き取られた。コロナ禍で面会もままならない状況の中、このまま病院で一人ぼっちにさせたままの別れになるのは絶対に嫌だと思った奥様の決断のお陰で、忠生さんは愛する妻の手に触れ、声を聞き、優しい眼差しに見守られて、人生最後の日々を過ごすことができた。癌の診断を受けてまだ数カ月というあまりに短い闘病生活の末の唐突な別れではあったが、最後の日々を住み慣れた我が家で、自分を誰よりも大切に思ってくれている人の傍で過ごすことができたのは、忠生さんにとって何よりの幸いだったと思う。

死亡診断した直後、さすがに奥様は全身の力が抜けたらしく、自分が寝るために居間に畳んで置いてあった布団にしなだれかかり、「何が起こってるんだろう…どうしたのかな…お父さん死んだんだよね…なんかよくわからないな…実感わかないな…何が起こってるんだろ…」などと感情が消えた虚ろな声で独り語りしていた。隣にある座卓で死亡診断書を書きながら、「伊三郎さんが迎えに来てくれてる…でしょうね」という私の呟きを聞いた奥様の声は電気のスイッチが入ったようにパッと明るい調子に変わって、こう言われた。「そうね！野口先生が迎えに来てくれてるわね！」

伊三郎さんが先に一人で入っていた墓には、間もなく忠生さんが加わることになるのだろう。